

〔古今和歌集十四〕題をらす

讀人をらす

陸奥のあさかの沼の花がつみかつ見る人に戀ひや渡らむ

〔都のつと〕みちの國淺香の沼をすぐ中將實方朝臣くだられけるに、此國には菖蒲のなかりければ本文に水草をふくとあれば、いづれもおなじこと也とて、かつみにふきかへけると申つたへ侍るに寛治七年河堀 郁芳門院の根合に、藤原孝善がうたに、あやめぐさひくてもたゆくながきねのいかで淺香の沼におひけん、とよめるは、此國にもあやめのあるにやと、年月ふしんにおぼえしかば、此度人にたづねしに、當國にあやめのなきにはあらず、されどもかの中將の君くだり給ひし時、なにのあやめもをらぬまづか軒ばには、いかで都のおなじあやめをふくべきとて、かつみをふかせられけるより、これをふきつたへたる也と、かたり侍しかば、げにもさる一義も侍るにや、風土記などいふ文にも、その國の古老の傳などかきて侍れば、さる事もやとてをらすしつけ侍る也、

〔古今和歌六帖三〕ぬま

いつとてかわがこひざらんみちのくの淺香の沼は煙たゆとも